

レベル差のあるクラスでの動画教材「Lesson for Useful Expressions in Japanese」の活用授業実践報告

倉品さやか
国際大学

要旨

本稿は、レベル差があるクラスにおいて本校作成の動画教材を用いた授業を行なった実践の報告である。まず、レベル差への対応を先行研究から探り、本学で作成した動画教材を使用する講座を計画し、全5回の授業を行なった。授業後に振り返りとして学生が書いた表現・語句とアンケートの結果をもとにレベル差に対応できたかを検討した。書かれた内容をレベルの異なる学生間で比較した結果とアンケートの回答から動画活用の可能性と改善点を述べた。

キーワード：レベル差、振り返り、動画教材、学習の個別化

0. はじめに

通年のコースや正規の日本語のコースではなく、短期間のプログラムや特別に編成されたコースなどではレベルを揃えることが難しいことがある。本学でも正規のコースとは別に、特定の条件で集められた学生たちに対して日本語の授業を行うことになったが、対象となった学生の日本語レベルに差があった。ほぼゼロ入門から初級後半レベルまでいたが、学生の数が多くなかったため、レベル別のクラスを作ることはできなかった。2015年度からこのクラスに対してさまざまな取り組みをしてきたが、ある学生からは難しすぎる、ある学生からはやさしすぎるというコメントがあり、このレベル差の問題をどう解決するかが課題の一つであった。

そこで、対象となる学生に共通する点を考えたところ、本学の学生は英語で専門の授業が行われるため、必要となるのはアカデミックジャパニーズではなく、学生寮から一歩外に出た生活場面での日本語であることが浮かび上がった。そこをクラス全体の大きな学習動機・目標に据え、具体的に導入する語彙や表現などの部分でレベル差に対応できないかと考え、授業を試みた。

本報告は、授業実践の内容と授業で学生が書いた振り返りの内容、そして講座全体の終了後に行なったアンケートの回答結果をもとにレベル差に対応ができたかどうかを検討し、今後の講座運営に役立てることを目的としている。

1. レベル差があるクラスでの授業

横溝（2011）ではレベル差に対応する方法として2つの方法が紹介されている。1つ

目は「学習者同士の教え合い」で、同じレベル同士の場合と異なるレベル同士の場合がある。2つ目は「レベル差を考慮に入れた教案を作成し、教材を用意しておく方法」で、この方法は「リスニング」「ライティング」「リーディング」などの授業で行いやすいと述べられており、その理由として、これらのスキルが基本的には個人学習が可能なものだとしている。

次に、レベル差のあるクラスでの具体的な実践報告として、里見（2011）、鈴木・ヨフコバ（2014）、元田（2015）を参考にした。まず、里見（2011）ではレベル差に対応した語彙授業の実践を報告している。これはフランスにおける実践で、「初級日本語を修了した学習者が共通する問題」として「語彙量の不足」をあげ、それを補うことを目的の一つにして、ポートフォリオを使った授業をしている。

鈴木・ヨフコバ（2014）では、レベル差のある初級学習者を対象にして日本文化クラスを実施している。「留学生生活を送る上で有用だと思われるトピック」を選び、ピアラーニングで授業を行った。また、初級前半クラスの学習者はコース開始時の日本語能力が極めて低かったことから媒介語（英語）を使用するなどの工夫をしている。

元田（2015）では、多様な日本語レベルの学習者が混在する聴解の授業で、同一の教材で全文を学習者が個人個人でコンピュータに入力する形でのディクテーションをし、1回目の提出後、教師からのフィードバックを受けて、2回目の提出（任意）をするという授業を行なっている。

これらの実践の形を横溝（2011）の2つの方法に照らし合わせてみると、鈴木・ヨフコバ（2014）は教え合う形にあたり、元田（2015）は個人学習の形に、そして里見（2011）は語彙を選び記録を作る作業は個人学習の形と授業内の発表は教え合う形にあたりと考えられる。一方、授業で扱う内容について見てみると、鈴木・ヨフコバ（2014）は留学生に有用だと思われる日本文化のトピック、里見（2011）は語彙を増やすという共通の目的、そして元田（2015）は全員が同じ教材をディクテーションしている。つまり、これらの実践では授業の内容や目的は参加する学生全員で同じものであるが、活動の形態でレベル差に対応している。よって、本実践でも、対象となる学生が必要となる日本語をアカデミックな場面のものでなく、生活場面での日本語であると考え、その習得をクラスの目標とし、活動や教材で個別化することにした。

2. 動画教材「Lesson for Useful Expression in Japanese」

前述したように本学では専門科目の授業が英語で行われ、学内の事務手続きなども英語で行え、学生寮はキャンパス内または近隣にあるため、学内にいる限りは日本語がわからなくても困ることは少ない。しかし、学外に一步出るとそこは日本であり、買い物や旅行などをする際には日本語が必要になる。竹内（2011, 2012）の調査の結果、本学の初級学習者が直面する問題として、交通手段の利用、買い物、飲食店などの場面での日本語が緊急性も高く、欲求段階も高いと明らかになった。本学では入学前に必要とな

る場面を選択し、竹内（2011, 2012）を参考にして動画教材を作成している（倉品・竹内・松田 2016）。

本実践で対象となる学生に共通しているニーズの一つとして、生活上必要になる短い表現の習得があると考え、本動画教材「Lesson for Useful Expression in Japanese」を使用することにした。理由は、本教材は日本での生活場面の会話表現を練習することを目的として作成されたことが第一であるが、そのほかに、主人公（日本を訪れるベトナム人）は入門・初級レベルの限られた文型や語彙を使用しているが、ほかの登場人物（日本人）が話す日本語は敬語を含んでいるなど、ほとんど学習者向けに調整していないものである点も挙げられる。よって、ゼロ初級の学生は主人公の話す日本語や「Today's expression（以下、「今日の表現」）」の習得を目指し、それでは簡単すぎる初級後半の学生は日本人の話すセリフを練習するというように、レベル差に対応した教材ができると考えた。さらに本動画には英訳がついているため、ゼロレベルの学習者も日本人が何を言っているかを自力で理解することができると思った。また、本教材は、ウェブサイト上でスクリプトがダウンロードできるようになっており、ローマ字版と漢字かな交じり版が入手可能である。ローマ字版を使うことで平仮名が読めない学習者にも対応しやすいと考えた。

以上のことから、本学では学習者が日本語使用の必要となる生活場面の日本語習得を授業全体の目標とし、レベル差に対応する方法としてレベル別に用意したディクテーションを個別のデバイスを用いて行うことにした。

3. 授業

3.1 講座概要

授業は2017年春学期（4月から6月、10週間）に全5回行われた。動画は全部で10話あったため、1回の授業で2話ずつ進むことにした。5回の授業は教員2名が交替で行なった。本実践は筆者が行なった1回目と3回目の授業を報告する。

筆者が行なった授業の主な流れとしては、①動画を見る（一斉）、②内容確認（一斉）、③レベル別シートでディクテーション（個別）、④答え合わせ（ペア）、⑤各自リピートやシャドーイングで練習（個別）であった。個別作業時は、学生自身が所有しているスマートフォンやパソコンまたは本学が貸し出したiPadとヘッドセットを使用した。質問は随時受け付け、個別に対応した。

3.2 学生の様子

初回の授業は、第1話「To get on a train」と第2話「To ask for a price」を使用した。YouTubeは使い慣れている学生がほとんどで、視聴時の操作に問題は特になかった。個別作業の前半は真剣に動画を視聴し課題をしていたが、後半は質問をする学生やリピートを自然に始める学生が出てきた。初級後半の学生は英訳や辞書では分からない語句の

意味についての質問があった。ゼロ初級の学生は、動画中の「今日の表現」やディクテーションで埋めた部分を繰り返し口に出して言う練習をしており、授業後にすらすらと筆者に言って見せた。

ディクテーション課題で空欄になっている箇所や数はレベルによって異なっていたが、かかる時間はほぼ同じであった。また、ディクテーション後に答えを合わせる際、レベルが異なる学生同士でペアになると相手のシートに答えがある場合もあり、自然とお互いに読み合わせを始め、協力して答えを確認するペアもいた。

4. 調査 1

本実践のディクテーション課題はレベル別に複数用意して行なったが、レベル差に対応できていたのだろうか。学習者は何を学んだと捉えたのか、それはレベルによって異なっていたのかについて探るため、第 3 回目（2017 年 5 月 9 日）の授業後に行なった振り返り用のシートをもとに検討する。本調査で明らかにしたいリサーチクエスチョン（RQ）は、以下の 2 点である。

方法：第 3 回目の授業の最後に、授業の振り返りとしてその日に学んだと思う表現を自由記述式で学生に記入してもらい、回収した。そこに書かれていたものを「学生が学んだ表現」と考え、分析の対象とした。

対象者：第 3 回目に振り返りシートを書いた学生は 5 名であった。1 名は初級の前半の学生で平仮名は読めるレベルであった（以下、修了したコース名から「基礎 1」とする）。ほかの 4 名は初級後半レベルで『げんき II』（The Japan Times）の第 15 課が終わっていた（以下、履修中のコース名から「初級 3」とする）。

RQ1: 学習者が学んだと記入したものは、基礎 1 と初級 3 の学生間で異なっているか。

RQ2: 学習者が学んだと記入したものは、動画内の「今日の表現」か、ディクテーションで問われたものか、全く別のものか。

授業後の振り返り用シートに学生が書いたものは、語彙や表現の一部である場合もあったが、いずれも箇条書きで書かれ、一つにつき 1 行使っていた。よって、1 行を 1 件として数えた結果、最少 3 件、最多 5 件であり、学生 5 名の平均は 4.4 件であった。学生が書いた具体的な表現・語句とその件数は表 1 のとおりである。

人数が少なく、偏りがある（初級 4 人、基礎 1 人）ため単純に比較はできないが、両レベルの学生に書かれていた表現・語句は、表 1 で網掛けになっている「別々（お願いします）」「お会計（お願いします）」「ご一緒（ですか）」「ごちそうさまでした」の 4 つであった。後述するが、これらはいずれも動画内で「今日の表現」となっており、簡単な練習も動画内にあるので、学生の記憶に残ったものと考えられる。

表1 レベル別記入表現・語句

初級3の書いた表現(人数)	基礎1の書いた表現(人数)
別々／別々でお願いします* (3)	別々で (1)
申し訳ございません (3)	
お会計、お願いします (2)	お会計 (1)
一緒ですか (2)	一緒 (1)
方(かた) (2)	
ごちそうさまでした (1)	ごちそうさまでした (1)
おだいに (1)	
クレジットカードでもいいですか (1)	
預かる (1)	
	ありますか (1)

*太字は動画内で「今日の表現」になっているものである。

グループ間で違いの出たものを見てみると、基礎1の学生は書かず初級3の学生が書いたものには「申し訳ございません」「方(かた)」「おだいに」「クレジットカードでもいいですか」「預かる」の5つであった。そのうち、「クレジットカードでもいいですか」以外の4つは「今日の表現」になっていないもので、授業をした時点ではまだ習っていない表現や語彙で、且つ、主に動画内の日本人のセリフであった。一方、基礎1の学生のみが書いている「(~は/が)ありますか」は初級3の学生にとっては既に学び、よく使っているものだったため、記入が0件だったのだろう。

以上の結果から考えると、両レベルの学生ともに学んだものとして書いている「今日の表現」に加え、初級3の学生だけが書いた表現もあることから、それぞれの学習者が自分にとって何か新しく必要に感じたものを選択し、学ぶことができたと思われる。

次に、レベル別に作成した課題と学習者が学んだものとの関係を見る。まず、動画内で「今日の表現」になっていた9つの表現(第5話「To pay」に5つ、第6話「To ask a shop clerk」に4つ)のうち、記入があったものは6つであった。レストランの支払い場面(第5話「To pay」)の表現の全てがいずれかの学生に書かれており、店員に聞く場面(第6話「To ask a shop clerk」)の表現は基礎1の学生が1つ書いたのみだった。上述したように、店員との会話の表現は、『げんき II』の15課を終えていた初級3の学生にとっては既に習った表現ばかりであった。しかし、基礎1の学生も4つの表現中1つのみであったことを考えると、第5話から先に見て練習したために第6話は時間が無かった可能性もある。ディクテーションで埋めるように空欄になっていたものとの関係を見ると、初級3は16件中15件、基礎1は5件中5件が一致した。課題作成時、基礎1

の空欄は「今日の表現」と同じものにしたので、学生は課題でも問われ、動画後半でも練習があるため、強く印象に残ったと思われる。一方、初級 3 の教材では、「今日の表現」以外も空欄にした。学生が書いたものを見てみると、「今日の表現」よりディクテーション課題で穴埋めをした表現のほうが多かった。「今日の表現」でもなく、ディクテーションで空欄にもなっていなかったものは 1 件（「預かる」）だった。

以上の結果から、動画をそのまま使用し「今日の表現」を中心にした授業を行った場合、初級 3 の学生からは「もう知っている」と不満が出たかもしれないが、ディクテーションで彼らの知らない表現に注目させたことで、何か新しいものを学んだと考えられる。

以上、学生が振り返り用シートに書いた表現・語句を見る限りではあるが、レベルが異なる学生は本動画を視聴して、それぞれのレベルで新しい何かを学んでいたことがわかった。また、学んだとする表現・語句は課題で書き取るよう指示されていたものがほとんどであった。レベル別に作成した課題によってそれぞれの学生に対して異なる表現・語彙に注目させることができたと思われる。

5. 調査 2 アンケート

次に、講座全体に関するアンケートの結果について報告する。全 5 回終了後にメールを介してオンラインでの回答を依頼した。本アンケートは最終授業終了直後ではなく、しばらく経った後だったため、残念ながら回答人数は少なく、7 名であり、そのうち本講座に参加したと答えた学生は 5 名であった。まず、講座全般について「boring(1)」か「interesting(5)」かについて聞いた 5 段階評価では概ね好評で、3 が 1 名、4 が 2 名、5 が 1 名、無回答が 1 名であった。自分にとって「difficult(1)」か「easy(5)」かについては、3 が 2 名、4 が 1 名、5 が 2 名で、難しいと感じた学生はおらず、ちょうどいいかやさしいと感じた学生が多かった。「useless(1)」か「useful(5)」かについては、3 が 2 名、5 が 3 名で、概ね好評だった。異なるレベルの学生が同じクラスにいることについて「not comfortable(1)」か「not mind(5)」かについては、1 名が 1 と回答していたが、他の 4 名は 4 と 5 に 2 名であった。

回答者のレベルとの関係を見ると、内容が「やさしい」と答えた学生は初級 3 の学生 2 名であった。元田（2015）では、レベル差に対応する授業で全文ディクテーションを行なっている。今後は空欄を多くする、あるいは既習の項目は入れないなどの工夫をしたい。また、異なるレベルが一クラスになることに否定的だった学生 1 名も、初級 3 の学生であった。河野（2014）のように、ペアで協力する部分で学び合いが生まれるようなクラス運営の方法を考えたい。

6. さいごに

以上、本学で作成した動画教材は入学前の自習用に作成したものではあるが、英訳が

あること、音声があること、日本人のセリフには初級以上の文型や語彙も含まれていることなどから、レベル差がある学生に対する授業での活用の可能性があることがわかった。ただし、授業内でレベル差がある者同士の活動や課題の内容に改善の余地があり、今後の課題としたい。

参考文献

倉品さやか・竹内明弘・松田由美子(2016)「日本語ゼロビギナーのための動画教材 Lesson for Useful Expression in Japanese の開発」『日本語教育方法研究会誌』Vol.22, No.3, 34-35

河野あかね(2014)「学習者の日本語能力のレベル差を活かした授業の実践報告—年少者対象の場合—」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.21, No.2, 30-31

里見文(2011)「ポートフォリオを利用した語彙学習の実践報告—フランスにおける学部1年次既習者クラス—」WEB版『日本語教育実践研究フォーラム報告』1-9

http://www.nkg.or.jp/pdf/jissenhokoku/2011_P13_satomi.pdf (2018年7月27日アクセス)

鈴木秀明・ヨフコバ四位エレオノラ(2014)「習熟度の異なる学習者に対する授業の可能性と課題：初級日本文化クラスの実践を通して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』29号,93-104

竹内明弘(2011)「初級学生が遭遇した接触場面の問題を授業に生かす実践活動」『Working Papers』LP-19-1

<http://www.iuj.ac.jp/language/pdf/research/LP-19-1.pdf> (2018年7月27日アクセス)

竹内明弘(2012)「初級学習者の言語管理上の問題をコース設計に反映する取り組み」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.19, No.1, 26-27

元田静(2015)「日本語レベルが多様な聴解クラスでの全文ディクテーションの試み」『東海大学紀要国際教育センター』第5号, 111-125

横溝紳一郎(2011)『日本語教師のための TIPS77 第1巻クラスルーム運営』くろしお出版

動画教材

「Lesson for Useful Expressions in Japanese」

http://www.iuj.ac.jp/language/japaness_videoclips.html (2018年7月27日アクセス)

資料

ディクテーション課題 (基礎 1)

#5 To pay

SITUATION 01

はるか：ごちそうさまでした。

グエン：ごちそ…？

はるか：()。★

グエン：あつ。()。★

はるか：()。

てんいん
店員：はい。

はるか：()。★

店員：はい。ありがとうございます。3760えん円です。()。★

はるか：はい。あのう、クレジットカード ()。★

店員：もう わけ申し訳あつかございません。クレジットカードは扱あつかっていないんです。

はるか：そうですか。じゃ、これで。

店員：はい、じゃ、()えん あず円お預まかりいたします。お待まちくださいませ。

はるか：はい。

SITUATION 02

はるか：すみません。

てんいん
店員：はい。

はるか：()。★

店員：ありがとうございます。2636えん円になります。()。★

はるか：すみません。()お願ねがいします。★

店員：はい。そばセットの方かたは ()えん円です。

はるか：はい。

店員：ありがとうございます。ちょうどいただきます。

すしセットの方も 1318えん円です。

グエン：1318えん円…はい。

店員：()えん あず円お預まかりいたします。